四条畷の戦

菊池寛

建武中興の崩壊

中島商相が、足利尊氏のために、災禍を獲た。尊氏の如く朝敵となったものは、古来外にも沢山ある。朝敵とならないまでも、徳川家康以下の将軍などは、それに近いものである。殊に温厚そうに見える二代将軍秀忠の如き、朝廷に対して、悪逆を極めている。

だが、尊氏丈(だけ)が、どうして百世の下、なお憎まれ者になっているか。それは、純忠無比な楠公父子を向うに廻したからである。尤も、中島商相を弾劾した菊池中将（九州の菊池神社を中心として、菊池同族会なる

ものあり、中将はその会長である。自分もその会員である）の先祖たる菊池氏も亦、五百年間勤王一途（いちず）の忠勤をつくした家柄で、山陽をして「翠楠必ずしも黄花に勝らず」と云わしめたが、活躍の舞台が、近畿でないから、楠公父子の赫々（かくかく）たる事蹟には及ばない。今、四条畷（なわて）の戦いを説くには、どうしても建武中興が、如何にして崩壊したかを説かねばならない。

元弘三年六月五日、後醍醐天皇は王政復古の偉業成って、めでたく京都に還幸された。楠正成、名和長年（ながとし）以下の凱旋（がいせん）諸将を従えられ、『増鏡』に依ると、其の行列は二条富小路の内裏（だいり）から、東寺の門まで絡繹（らくえき）と

して続いたとある。供奉の武将達も、或は河内に、或は伯耆に、北条氏討滅の為にあらゆる苦悩を味った訳であるから、此の日の主上及び諸将の面上に漂う昂然たる喜色は、想像出来るであろう。

かくて建武中興の眼目なる天皇親政の理想は、実現されたのである。だがそれと同時に、早くも此の新政府の要人連の間に、逆境時代には見られなかった内部的対立が兆していた。つまり武家と公卿が各々、自分こそ此の大業の事実上の功労者であると、銘々勝手に考え出して来た為である。

武家にすれば、実力の伴わぬ公卿達の如何にもとり

澄した態度が気に食わなかったに違いない。恐らくは、「俺たちに泣きついて来た当時を忘れたのか」と言い度いところであろう。それに一緒に仕事をしてみても、何だか調子が会わない。その平和になって、文事ばかりになると、河原の落書にまで「きつけぬ冠上のきぬ、持もならわぬ笏もちに、大裏交りは珍らしや」と愚弄されるのも癪(しやく)に触る。その上、素朴な一般武士の頭には、延喜天暦(てんりやく)の昔に還らんとする、難しい王政復古の思想など、本当に理解される訳はないのである。

唯自分達の実力を信ずる彼等は、北条氏を滅ぼしたのは、俺達の力だと確く信じ、莫大なる恩賞を期待し

て居るのである。

一方公卿の方にも、此等の粗野ではあるが単純な武家に対して、寛容さを欠いて居たし、之をうまく操縦する方略にも欠けていた。頼朝以来武家に奪われていた政権が、久し振りで自分達の掌中に転がり込んだのであるから、有頂天になるのは無理もないが、余りにも公卿第一の夢の実現に急であった。窮迫した財政の内から、荘厳なる大内裏の造営を企てたりした。其他地方官として赴任した彼等の豪奢な生活は、大いに地方武士の反感を買った。一時の成功にすぐ調子に乗るのは、苦労に慣れない貴族の通性であろう。彼等はし

ばしば厳然たる存在である武家を無視しようとした。
北畠親房は『神皇正統記』に於て、武家の恩賞を論じて「天の功を盗みて、おのが功と思へり」と言って居る。歴史家として鋭い史眼を持って居た親房程の人物でも、公家本位の偏見から脱する事が出来なかったのである。
これでは武家も収らない。
『太平記』の記者は、
「日来(ひごろ)武に誇り、本所(ほんじょ)を無(なみ)する権門高家の武士共いつしか諸庭奉公人と成(なり)、或は軽軒香車の後に走り、或は青侍格勤の前に跪(ひざまず)く。世の盛衰、時の転変、歎ずる

に叶はぬ習とは知りながら、今の如くにして公家（こうけ）一統の天下ならば、諸国の地頭御家人は皆奴婢雑人（ぞうにん）の如くにてあるべし」

と、その当時武士の実状を述べて居る。

其の上、多くの武士には恩賞上の不満があった。彼等の忠勤は元来、恩賞目当てである。亦朝廷でも、それを予約して味方に引き入れたのが多いのである。云わば約束手形が沢山出されていたのである。

後醍醐天皇が伯耆船上山に御還幸の時、名和長重は

「古より今に至るまで、人々の望む所は名と利の二也」

と放言して、官軍に加ったことが『太平記』に見える。

其の真疑はとにかく、先ず普通の地方武士など大体こんな調子であろう。伝うる所によれば、諸国から恩賞を請うて入洛し、万里小路（までのこうじ）坊門の恩賞局に殺到する武士の数は、引きも切らなかったと言う。だから充分なる恩賞に均霑（きんてん）し得ない場合、彼等の間に、不平不満の声の起きるのは当然である。

或日、塩谷（えんや）判官高貞が良馬竜馬を禁裡に献上したことがあった。天皇は之を御覧じて、異朝は知らず我が国に、かかる俊馬の在るを聞かぬ、其の吉凶如何（いかに）と尋ねられた。側近の者皆宝祚（ほうそ）長久の嘉瑞（かずい）なりと奉答したが、只万里小路藤房は、政道正しからざるに依り、房

星の精、化して竜馬となり人心を動揺せしめるのだと云って、時弊を痛論した。即ち元弘の乱に官軍に加った武士は、元来勲功の賞に与（あずか）らん為のみであるから、乱後には忽ち幾千万の人々が恩賞を競望して居る。然るに公家（くげ）一味の者の外は、空しく恩賞の不公正を恨み、本国に帰って行く。かかる際にも不拘（かかわらず）、大内裏の造営は企劃され、諸国の地頭に二十分の一の得分をその費用として割当てて居る。其上、朝令暮改、綸旨（りんし）は掌（たなごころ）を飜す有様である。今若し武家の棟梁（とうりょう）たる可き者が現れたら、恨を含み、政道を猜（そね）むの士は招かざるに応ずるであろう。夫れ天馬は大逆不慮の際、急を遠

国に報ずる為め聊（いささ）か用うるに足る丈である。だから竜馬は決して平和の象徴ではない、と云うのだ。

それが、『太平記』の有名な竜馬諫奏（かんそう）の一挿話である。元来太平記は文飾多く、史書として其の価値を疑われ、古来多くの学者から排撃されて居る。併し藤房をして中興政治の禍根を指摘させて居る所など、『太平記』著者の史眼は炯々（けいけい）として、其の論旨は肯綮（こうけい）に当って居ると思う。

思うに尊氏はその所謂棟梁である。門閥に於ては源氏の正統であり、北条氏でさえ之と婚姻を結ぶのを名誉と考えた程の名家である。何時頃から此の不平武士

の棟梁としての自分を意識したか知らないが、六波羅滅亡後、一時京都が混乱に陥った時、早速奉行所を置いて時局を収拾した芸当など、実に鮮かなものである。一見極めて矛盾した様な性格らしく、それだけに政治家としては、陰翳（いんえい）が多い訳だ。

だから誇張されれば、いくらでも悪人になり得る。直木三十五は「尊氏は成功した西郷隆盛である」と評して居るが、人物としては相当なものである。中島商相位に賞められてもいいのであるが、前にも云った如く、人間として純粋無比な楠公父子を相手にしなければならなかった所に、彼の最大の不幸があると思う。

恐らく勝利の悲哀を此の男程痛切に味った者は、国史には尠(すくな)いのではなかろうか。

正成と正行

楠氏は元来橘氏の出である。勿論其の由緒に就ては詳しいことは何も分らない。当時、河内の東条川に拠った一小豪族に過ぎないのだ。

恐らく挙兵前の大楠公は、地方によく有る好学の精神家であり、戦術家であったろうと思う。

足利、新田の如く源家嫡流の名家でもないし、菊池、

名和の如く北条氏に対して百年の怨讐（おんしゅう）を含んでいたわけでもない。亦皇室から特別の御恩を戴いたこともないだろう。然るに渺（びょう）たる河内の一郷士正成が敢然立って義旗を翻すに至った動機には、実に純粋なものがあるのだ。学者の研究に依ると、正成は宋学の造詣（ぞうけい）が相当深かった様だ。宋学の根本思想の一つは忠孝説である。つまり学問的に正成は忠義の何物たるかを熟知して居たのだから迷わないのだ。最初から、功利的忠義ではないのだ。尚、宋学は当時後醍醐天皇初め南朝公家の間に盛に行われて居たから、正成は天皇と同系統の学問をして居たことになる。南柯（なんか）の夢で正成を

笠置に召し出したのが奉公の最初であるとする、『太平記』の説はさて措き、早くからこの君臣の間に、ある関係があったことは想像出来る。正中の変前に、日野俊基が山伏姿で湯治と称し、大和、河内に赴いたことは、『増鏡』や『太平記』に立派に記してあるが、恐らくこんな時、楠氏と朝廷とが結ばれたのかも知れない。或はもっと早く、学問上の関係から、天皇と正成は相共鳴する所があったのではあるまいか。

　とにかく正成は出発点からして、他の多くの諸将と違って居る。つまり学問上の信念を純粋に実践に依って生かして居るからだ。『太平記』の記者などは、所き

らわず正成を褒め倒して居るが、これなども戦記作者を通じて、当時一般の輿望が現われているのである。

或日、武将達が集って、建武中興で一番手柄のあった者は誰だろうと議論があった。各々我田引水の手柄話に熱を上げて居ると、正成は「それは菊池（武時）だろう」と言った。滅多に人をほめたことのない新田義貞も、此の一言には非常に感動したと云う（『惟澄文書』）。その謙抑知るべしだ。

戦後の論功行賞にしてもそうだが、尊氏や義貞に比して、正成は寧ろ軽賞である。それでも黙々として忠勤を励む其の誠実さは、勘定高い当時の武士気質の中

にあって、燦然（さんぜん）として光っている。
　最近公刊されたものであるが『密宝楠公遺訓書』と云う本がある。正成が正行（まさつら）に遺言として与えたものであると云う。その中に、
「予討死する時は天下は必ず尊氏の世となるべし。然りと云へども、汝、必らず義を失ふことなかれ。夫れ諸法は因縁を離れず。君となり臣となること、全く私にあらず。生死禍福は、人情の私曲なるに随（したが）はず。天命歴然として遁（のが）るゝ処なし」とある。少し仏法臭を帯びては居るが、秋霜烈日の如き遺言である。名高い桜井の訣別の際の教訓にしてもそうだが、兎に角斯（こ）う

した一種の忠君的スパルタ教育で、小楠公は鍛えられたのだ。幼少時代の正行を記すものは、『太平記』唯一つである。湊川（みなとがわ）で戦死した父の首級を見て、自殺せんとして母に諌（いさ）められ、其の後は日常の遊戯にまで、朝敵を討ち、尊氏を追う真似ばかりして居たと云う。

思うに彼を取巻く総（すべ）ての雰囲気が、此の少年を、亡父の義挙を継ぐべき情熱へと駆り立てて行ったのであろう。

『吉野拾遺』に、正行が淫乱な師直（もろなお）の手から弁内侍を救ったと云う有名な話がある。

「正行なかりせばいと口惜しからましに、よくこそ計

ひつれ」と後村上帝が賞讃し、内侍を正行に賜らんとした。すると正行は、

「とても世に、ながらふべくもあらぬ身の、仮の契をいかで結ばん」

と奏して辞したと云う。

多分に禁欲的な、同時に自己の必然的運命を早くから甘受して居る聡明な青年武将の面影が躍如としている。

正行の活動

延元四年の秋、後醍醐天皇は吉野の南山行宮（あんぐう）に崩御せられた。北畠親房は常陸関城にあって此の悲報を聞き、「八月の十日あまり六日にや、秋露に侵されさせ給ひて崩（かく）れましましぬと聞えし。寝（ぬ）るが中なる夢の世、今に始めぬ習ひとは知りながら、かず〱目の前なる心地して、老（おい）の涙もかきあへねば筆の跡さへ滞りぬ」と『神皇正統記』の中で慟哭（どうこく）して居る。

正成夙（つと）に戦死し、続いて北畠顕家（あきいえ）は和泉に、新田義貞は北陸に陣歿し、今や南朝は落漠として悲風吹き荒（すさ）び、ひたすら、新人物の登場を待って居た。

そこへ現れたのが、楠正行である。彼は近畿に残存

する楠党を糾合し、亡父の遺訓に基いてその活動を開始したのである。

元来楠党は山地戦に巧みである。正成が千早城や金剛山に奇勝を博し得たのは、一に彼等の敏捷な山地の戦闘力に依ったのである。従って正成の歿後も、河内、摂津、和泉地方の楠党は山地にかくれ頑強に足利氏に抵抗して居たのである。だからそうした分散的な諸勢力を一括した正行は、今や北朝にとっては一大敵国をなして居るわけだ。

正平二年七月、畿内の官軍は本営を河内東条に移し、菊水の旗の本に近畿の味方を招集し始めた。即ち北畠

親房、四条隆資（たかすけ）等の共同作戦計画が出来たので、本営を此の地に据えて、吉野の軍と相策応したのである。実に正成の本拠であった河内東条と、行宮のある吉野は、官軍の二大作戦根拠地であった。時の京畿（けいき）官軍の中心は言うまでもなく、正行の率いる楠党であった。

　八月十日、正行は和泉の和田氏等の軍を以て紀伊に入り、隅田城を急襲して居る。これは東条と吉野との連絡を確実にする為であって、大楠公の赤坂再挙の戦略と全然同一のものである。果然これを機会として京畿の官軍は一時に蜂起し、紀伊熊野諸豪多く官軍に応じ、和泉摂津にも之に響応する者が少くなかった。此

の報を得た賊軍側は大いに駭(おどろ)き、細川顕氏(あきうじ)に軍を率いしめ、八月十九日に大阪天王寺を出発せしめて居るが、彼は泉州に於ける優勢な楠勢にはとても敵せぬと、京都に報告して居る。小康を得て居た当時の京都の人心は為に恟々(きょうきょう)として畏怖動揺したとみえる。洞院公賢(きみかた)は其の日記に此の仔細を記して居るが、京都の諸寺一時に祈禱の声満つると云う有様であった。

然るに楠軍は一旦兵を河内に還して居る。そして九月九日に八尾城を攻撃し、十七日には河内の藤井寺附近に於て、大いに顕氏の軍を破り、正行は初陣の武名を挙げたのである。

『細々要記』に「京都より細川陸奥守以下数十人河内発向藤井寺に陣す。其夜正行等不意に寄せ来り合戦。京勢敗北死人数を知らず」とあるから、今や正行怖る可しと痛感したようだ。

次いで十一月二十六日、正行は和田助氏を先陣として住吉天王寺附近の敵を邀撃(ようげき)した。此の戦勝は圧倒的であり、したたかにやられた賊軍はすっかり、狼狽したらしい。彼等の記録に、「今夕(こんせき)討死、疵(きず)を蒙る輩数を知らず。以(もって)の外のことなり。之を為すこと如何」と放心の状である。

此の戦(いくさ)は霜月のことであるから、橋から落ちて流

れる敵兵五百余人の姿は、惨澹たるものがあった。正行は是を憫(あわれ)んで彼等を救い上げ、小袖を与えて身を温め、薬を塗って創(きず)を治療せしめたと『太平記』にある。「されば敵ながら其情を感ずる人は、今日より後心を通はせん事を思ひ、其の恩を報ぜんとする人は、軈(やが)て彼の手に属して、後四条畷手の戦に討死をぞしける」いくらか美化して書いたのであろうが、小楠公を飾る絶好の美談であろう。

周章した足利直義は、遂に十二月、高師直(こうのもろなお)、師泰兄弟を総大将として中国、東海、東山諸道の大軍を率いて発向せしめ、最後の決戦を企てた。

元来正行は常に寡兵を以て、敵の不意を襲って大勝利を得て居る。尤もそれより外に方法はないのだ。四条畷の戦では、敵は比較にならぬ程の大軍であり、其の精兵は日一日と増加して居る。佐野佐衛門氏綱の軍忠状に依ると、合戦の日の五日の日にまで、敵には続々馳せ参ずる兵があったと云う。此の敵に対し堂々の陣を張る事が不得策であるのは、明瞭であるから、正行は敢て東条に退いて自重せず、速戦速決で得意の奇襲に出でたと解す可きだろう。時恰も鎮西に於ける官軍の活動も活潑であった。正行にすれば、此の際東西相呼応する大共同作戦も胸中に描いて居たらしい。併

し何としても敵は十数ヶ国の兵を集めて優勢である。味方は、河内和泉などの寡兵である。南朝恢復の重任を以て任じて居たものの、正行も、到底勝つべき戦とは思っていなかったであろう。

正行の戦死

今や楠党は主力を東条に集結し、別軍は河内の暗（くらがり）峠を固めて、敵を待った。此の間、彼が作戦奏上の為め、吉野に参廷したあたりは、正に『太平記』中の圧巻であって、筆者は同情的な美しい筆を自由に振って、

悲愴を極めた光景を叙述している。

即ち、参廷して父の湊川に於ける戦死を述べ、今こそ亡父の遺志を遂行する心からの歓喜に言及し、師直兄弟の首に自らの首を賭けて必勝を誓って居る。

「今生(こんじょう)にて今一度竜顔を拝し奉らんために参内仕りて候ふと申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心其の気色に顕れければ、伝奏未(いまだ)奏せざる先にまづ直衣(ひたたれ)の袖をぞぬらされける。主上則ち南殿の御簾(みす)を高く捲せて玉顔殊に麗(うるわ)しく、諸卒を照臨ありて正行を近く召して、以前両度の戦に勝つことを得て、敵軍に気を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する条、累代の武功返すぐ

も神妙なり、大敵今勢を尽して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし、…朕汝を以て股肱（ここう）とす。慎で命を全ふすべしと仰せ出されければ、正行頭を地につけて、兎角の勅答に及ばず」［＃「」」は底本では「』」］

場所は古来伝称の吉野山である。君臣の義相発して情景相具（あいそなわ）った歴史の名場面ではないか。かくて共に討死を誓った一行は後醍醐天皇の御廟に詣で、如意輪堂の壁に各姓名を書き連ね、その奥に有名な「かへらじと」の歌を書きつけたとある。だが、これはうそである。普通に常識の有る者が、御陵の傍のお堂に、勝手な落書をして行くなんて、考えられないのである。

まして、正行の如き純粋な忠臣に於てをやだ。楠公万能の義公であるから仕方がないとしても、『大日本史』までもが『太平記』の真似をして「同盟の姓氏を如意輪堂の壁に題し、歌を其の後に書して曰く」とやって居るのは、どうかと思うのである。恐らく、名前は寺の過去帳に書いて行ったのであろう。それが今、如意輪堂に行くと、堂々と此の歌を書きつけた扉が残って居る。書きつけた壁でも残って居るのならまだしも、扉になって居るのは二重の間違いである。

然し、少し嘘がある方が、歴史は美しい。児島高徳（たかのり）の桜の落書と云い、『太平記』にも大衆文芸の要素があ

るのだ。

四条畷の戦は正月五日に起って居る。此の日の戦闘を『太平記』なんかで考えてみると、先ず師直は本営を野崎附近に敷き、その周囲には騎兵二万、射手五百人を以て固めて居る。

その第二隊は生駒山の南嶺に屯(たむろ)し、大和にある官軍に備えて居る。師泰の遊軍二万は和泉堺を占領し、楠軍出動の要地である東条を、側面から衝かんとして集結中である。要するに賊軍の配備は消極的で、東条を包囲して徐々に半円径を縮めんとするものらしい。

一方官軍は三軍を編成し、正行は弟の正時と共に第

一軍を率い、次郎正儀（まさのり）は東条に留守軍となって居た。吉野朝廷からは北畠親房が老軀を提（ひっさ）げ、和泉に出馬し、堺にある師泰に対抗して居た。亦四条隆資は、河内等の野伏の混成隊を以て、生駒山方面の敵を牽制して居る。『太平記』は正行の奮闘は詳説するくせに、此等の諸軍の動静を閑却して居るが、師泰なんか四条畷戦後、北畠軍に大いに進軍を防遏（ぼうあつ）されて居るのである。

　正行直属の兵は凡そ一千人位で、当時大和川附近の沼沢地に陣して居た師直の本営を掩撃す可く突撃隊を組織した。

　五日早旦、恐らく午前六時頃だろう。正行は自ら突

進隊五百騎を提げて、一直線に北に強行突破を企てて居る。敵の前哨は全く蹂躙(じゅうりん)されて、約半里も北に圧迫されて居る。此の時四条隆資軍に牽制されて居た生駒山方面の敵は、この有様を俯瞰して、四条軍を捨ててどっと山を下り、楠軍の後続部隊に躍りかかった。つまり思わぬ新手の出現で、楠軍の突進隊は後方から切断された訳だ。

此の時正行の手兵僅かに三百。なおも果敢な肉迫戦を続けて行く中、流石の師直の本陣もさっと左右に靡(なび)いた。踴躍して飛び込むと、早くも師直は本営を捨て、北方、北条村に退かんとして居る。恰も此の辺は沼沢

地であり、走るに不便だ。追うこと暫くして、其の間半町、将(まさ)に賊将を獲んとした時、賊将上山(かみやま)六郎左衛門、猝(いつわ)って師直の身代りになって討死した。

その為に大分暇をとった。それでも執拗に追撃の手をゆるめなかったが、突然敵方に強弓の一壮漢が現れた。九州の住人、須々木(すずき)四郎と名乗って雨の如く射かけたから堪らない。

楠次郎は眉間をやられ、正行も左右の膝口三ヶ所、左の眼尻を深く射抜れた。

午後四時頃であろう。野崎の原頭(げんとう)、四条畷には群像の如き三十余騎の姿が、敵軍に遠く囲まれながら茫然

として立ちすくんで居る。長蛇を逸した気落ちが、激戦三十余合で疲労し切った身体から、総ての気力を奪い去って居る。

飯盛颪（おろし）に吹き流される雲が、枯草が、蕭条（しょうじょう）として彼等の網膜に写し出され、捉える事の出来ない絶望感が全身的に灼（や）きついて来たのであろう。

正行は、「嗟（ああ）、我事終れり」と嘆じて、弟正時と相刺し違えて死んだ。相従う十三余士、皆屠腹（とふく）して殉じた。

正行戦死の報が京都に達すると、北朝では歓呼万歳を唱えて喜んだと云う。可なり嬉しかったんだろう。それだけに此の悲報は南朝にとっては大打撃であった。

為に後村上天皇は難を賀名生（あのう）に避けられ、吉野の行宮は師直の放火によって炎上し、南朝の頽勢は既に如何ともし難い。

恐らく正史に於ける正行の活動は数年に過ぎない。亦正成にしても、大体そんなところである。それで今日までその純忠を謳（うた）われるのであるから、人間としてもまずこれ程立派な父子は、日本史中古今稀である。その正成父子に対する崇拝が反尊氏思想となり、日本一の不忠者のように云われ、六百年の後まで、中島商相にまで祟（たた）るのである。然し、当時正成の策戦を妨害して、正成に湊川で無理な軍をさせ、事を誤った公卿の

子孫である、貴族院の子爵議員などが、今更尊氏の攻撃をするのはおかしい。

底本：「日本合戦譚」文春文庫、文藝春秋社
1987（昭和62）年2月10日第1刷
※底本は、物を数える際に用いる「ケ」（区点番号5-86）（「十数ヶ国」）を、大振りにつくっています。
※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。
入力：網迫、大野晋、Juki
校正：土屋隆
2009年11月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。